第３回

夢アイデアを活かす今日的意味

平成２３（2011）年１月

新しい年を迎え、夢アイデアの十年を振り返りつつ、新たな想いで今後の方向性を考えてみたいと思います。少し長文になりますことをご容赦願います。

夢アイデアプロジェクトがスタートしたのが平成１４年度ですから、２３年度で１０年目を迎えることになります。一般市民に対して、「あなたの夢アイデアを設計図にしてみませんか？」―まちづくりに関する提案の募集― としてチラシを作り、公共機関の掲示板などに張り出したりして応募を行った結果、初年度 67 編の応募を皮切りに、22 年までに 430 余編に及ぶ提案が集まりました。正直、迷案も珍案もありますが、どこで活きるか判らないので貴重です。徐々に制度も予算も充実した 17 年度からは、「夢アイデアの募集」のみならず、その提案をもって市町村に出向いて実現性に関して意見交換を行う「交流調査団派遣」、土木デザイン系学生の合宿に参加してともに学び合う「人材育成」、夢アイデアの発表と一般市民との交流の場を提供する「夢アイデア交流会」の３つの事業を加えた４本柱で行ってきました（ここにきて、夢アイデアの蓄積から「夢アイデア実現化」を強力に推進することとされたため、交流調査団派遣は発展的に解消して実現化事業に含めることとされました）。

簡単に言えば、主催者である建設コンサルタンツ協会九州支部が、市民がその想いを発信できる場を提供し、微力な個人々々の力を連携させ、具体の行動を起こすためのコーディネーターとなり、かつ、建設技術者のノウハウを、地域組織である「夢アイデア実現希望団体」に提供する、社会的仕組みともいえましょう。

このプロジェクトの重要なキーワードが「市民発の夢アイデア」、「異なるものの交流とコラボレーション」の２点です。そこで、では、市民の夢アイデアを掘り起こすということは、現代社会においてどのような意味があるのかを考えてみたいと思います。

１．表面でなく深層部が透けてくる。地域づくりがより本質的なところから出発できる

九州郷づくり共助研究会のホームページにも述べてありますが、大野川流域を対象とした夢アイデアコンテストが地域の有志（大野川流域ネットワーキング）で主催されました。夢アイデア募集・発表の地域版です。筆者は審査委員長として参加させていただきましたが、提案された一般市民、学生、子供らが発表した 10 数編の夢アイデアの内容をじっと見つめるうちに、私には、その地域が直面する課題も、悩みも夢も現れてくるよう

に感じました。さらには、地域に潜在していた資源とか価値あるものが見え、地域の風土に育まれた住民の感性、価値観のようなものが浮かび上がってきたのです。野辺の花、清らかな水辺、そういったものを大切にする人びとだ、といったことが痛いほど分かってくるのです。一方、夢アイデアを聴いたよそ者の私には、どのような支援が可能だろうか、という想いが自然に湧きあがってきました。この双方の想いを無視しての地域づくりは難しいという意味でも、想いを出し合うこの手法は、地域をデザインするステップとして欠かせない、根源的なアプローチではないかと思えました。

巷間、市民発意のプロジェクトはたくさんあります。新聞等に掲載されるプロジェクトはすでに形があって実施中のものが多いのですが、それに比して「市民発の夢アイデア」は、未だ形をなすに至っていない、いわばプロジェクトの原石にすぎません。その原石を多くの市民が共有し温めることで磨かれてプロジェクトとして形を整え、いくつかは「新しい公共」として育っていきます。ですからこのステップを提供する夢アイデアプロジェクトは、【一般市民の夢アイデアを活かすことを使命とする「新しい公共」】と定義してもよいかもしれません。

２．価値観が多様化した今日、垣根を越えて交流することが極めて大切である

女性たちが井戸端会議で不満を漏らしていました。「道は渋滞したら困るのよね。おしっこをするところもない。道にも駅があればいのに・・・・・・」「ったくそうなんよね」わいわいがやがや話し終わると散っていきました。これならボヤキで終わりですが、これを多様なグループが参加する場で発表するとします。そこには道路行政の担当者もいます。このぼやきが大変貴重なヒントを与えてくれるわけです。「道にも駅か！」灯台もと暗しの当事者には目から鱗が落ちる想いでした。これが平成２年春、あらゆる垣根を越えた人びとによりなる「中国・地域づくり交流会」で発想された「道の駅」のスタートでした。

「道の駅」は平成４年頃には制度として発足し、全国の道路管理者にも通知されていたはずで、着々とあちこちで開設が進んでいました。「道の駅」は、一定の要件を満たすことを条件とする登録制となっており、すっかり国民の支持を得て今日、ノウハウはアジアハイウェイなどにも輸出されるに至っています。

しかし、制度発足から３，４年間は、私が誰それとなく道の駅について聞いても、だれも知りませんでした。６，７年目になる約半数ほどが、あぁ、それなら知っているよ、となり、十数年目にもなるとご承知の通りです。それに比較しますと、夢アイデアプロジェクトはまだまだですが、爆発的普及期を迎えるには何事もそれほどかかるということでしょう。

異業種交流が盛んであるように、ヒントを得るためには異種グループ間の交流が有効な場合が多いわけですが、新しい発想を求める究極の姿として、業種はもちろん、産・官・学、国籍、老若男女などの一切の垣根を

越えて、夢やアイデア、知識・知恵が交流するのが理想でしょう。アヒルがハクチョウに変身する、夢アイデアプロジェクトもそのような機会を提供していると思います。

３．夢アイデアプロジェクトには閉塞社会を打破するエネルギーと希望を生みだす力がある

閉塞感漂う今日、出口のない不満や不安が充満しています。仮に夢があったとしても、実現なんて夢のまた夢・・・・・・、多くの市民はそう嘆じているに違いありません。

22 年 12 月 11 日、福岡市で開催された夢アイデア交流会は、その途中経過を評価してこれからを語り合う会ともなりました。予め選定した 10 編の発表があり、その後、３つのプロジェクト推進者による座談会が行われ、途中で見えてきたものなどを熱心に語りあいました。まだまだ事例は数少ないのですが、夢アイデア実現化プロジェクトに参加したすべての人びとは、閉塞という名の海に漂う中にあって、希望という島に向かって漕ぎだした、という歓びを語っていました。すなわち、「夢の実現化を推進したすべての人びとが、汗を流したことは歓びだった」と異口同音に発言していたことが印象的でした。

ヤギ羊 ECO 大作戦を指導されておられる島原農業高校の山田教諭は、生徒とともにヤギ・羊 ECO プロジェクトを進めるうちに、生徒たちが積極的に提案したり実践したりするようになり、父兄からも、子供に自信がついてきた、ありがたい、などの感謝の言葉をいただいている、と報告されました。テーマは、ヤギやヒツジを活用した循環型社会の構築でもあるのですが、それによって、持続的発展可能な地域形成を目指し、その中に、「こうして育った生徒たちが就職する場が出来ていけば素晴らしい」とも語っておられました。こうなると田園定住圏の構築ということになって、夢は一段と高いレベルに昇っているわけで、心より感服いたしました。これを弁証法のアウフヘーベンというのでしょうか。

柴北川を愛する会の渡邊雪法 事務局長は、子どもたちが柴北探検隊の前面に立つに及んだ経緯について触れ、「彼らは大人たちが一所懸命にやっていることをみて、自分たちもやらねば、と思ったのでしょう」と自発的な考えが芽生えた点について指摘し、「当初、遠くから傍観していた人びとの多くも次第に近づいて一緒にやるようになった」とも述べていました。大野川流域の”夢アイデアコンテスト”を企画立案された幸野敏治氏は、「よそ者が来て地域の良さも悪さもえぐり出していく、そこには抵抗感もあっただろう、けれどもそれが課題を浮かび上がらせ、夢が形を整えるきっかけになる。夢を追う過程で地域は充実し質的に向上する。熱意はあってもどうすればよいか分からない『地域』と手助けするグループの出会いは幸せであった」とも述べていました。地域という横軸と専門家機能の縦軸との掛け算が功を奏するわけでしょう。

一方、九州郷づくり共助研究会の主力メンバーの一人、木寺 佐和記 氏は、特に、柴北川を愛する会会員とともに山桜の調査や手当をした経験から、西行の「願わくは　花のもとにて春死なむ その如月の望月のこ

ろ」の歌を引きつつ「この出会いによって精神的にも成長した想いです。それはマズローのいう自己実現への歩みでもあったのですが、私としては、究極的には自己実現のレベルに『自然との一体化』（の感覚）を加えたい」と、到達したその心境を語っていました。無の文化の神髄、日本人ならではの感慨ではないでしょうか！

異口同音に語られる、この種の運動に参加することにより達成される「歓び」あるいは心の深化・・・・・・。一つは、無償の奉仕活動に歓びを感じる事実は、山川草木悉皆成仏・・・・・・誰にも存する"仏性"に目覚めることを物語ってはいないでしょうか。次に、心を未来志向にすること、夢や希望を想い描くこと自体が胸ときめくことであり、生理学的にみてもハッピーなことに違いありません。夢アイデアプロジェクトには、参加する人びとの心に働きかけ、ワクワクさせ、人びとを元気づける作用があるのでしょう。

ところで、毎朝、新聞を開くにつけ暗いニュースに満ちています。人はほとんど暗いニュースで一日を始めているのです。これで落ち込まないはずがありません。世を挙げて改善運動が必要ではないでしょうか。日本人の精神の最深層部が明るい未来志向型に転換しなければ、活気溢れる国への再生は覚束ないのではないでしょうか。さらに、多くの人びとが仏性に目覚めなければ温かい社会は築けないのではないでしょうか。とすれば必要なのは、第一は、心のベクトルを暗から明に変える、いわば「暗から明」への精神革命では？　と思えてきました。そうなれば何かの気づきをきっかけに、「新しい公共」に歓んで参加する人は大幅に増えて、「新しい公共」を中心とする第三極の社会的な存在は目に見えて大きくなるのではないでしょうか。気づきを与えること、夢アイデアを活かす意味をそこに求めたい想いです。

針貝　武紀
初代夢アイデア企画委員長 現・特別顧問